

あとがき

学生時代に京都で暮らしたことがある私にとって、白川は馴染みのない川ではなかった。しかし、今回、リーフレット執筆に当たり、川部会および琵琶湖・淀川水質保全機構のメンバーとの川歩き以外に、3回の写真撮影を行い、白川を隅々まで知ることになった。中でも名水・滝の探訪は初めての経験であり、新鮮な驚きがあった。また、沈砂池や疏水分線との立体交差をじっくり眺め、銀閣寺をはじめとする古刹の歴史をあらためてひも解くことができた。

祇園花街をゆっくり体験できたことも忘れられない。女将・芸妓さんへのアンケートでは、祇園花見小路スナック・トミの小石一子女将に多大のご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

心残りなのは、白川を守るNGOの人々に会う機会をまだ持っていないことである。白川を「里の川」たらしめる“人と川とのかかわり”を実践している人々と、ぜひ意見交換してみたい。私の宿題である。

(社)日本水環境学会関西支部川部会／古武家 善成

参考文献

- ・朝日新聞2009年11月7日朝刊記事「谷崎の誤り水にながる」。
- ・太田 達、平竹耕三編著(2009)京の花街 ひと・わざ・まち,246pp,日本評論社,東京。
- ・梶原正昭,山下宏明校注(1999)岩波文庫 平家物語(一),398pp,岩波書店,東京。
- ・河野仁昭(2000)京の川 -文学と歴史を歩く,269pp,白川書院,京都。
- ・祇園甲部組合(2009)ぎをんNo.199夏季号,43pp。
- ・京都市計画局(1985)「京・白川-白川周辺景観整備地区調査報告書」,70pp。
- ・京都市建設局水と緑環境部河川課(2003)京都市河川課広報誌 水鏡,64pp。
- ・京都府(1977-2008)各年度公共用水域及び地下水の水質測定結果報告書。
- ・小林保治編(2007)平家物語ハンドブック,272pp,三省堂,東京。
- ・古武家善成(2009)関西の川歩きNo.34 疏水分線 -碩学の徒が思索し歩いた哲学の道-,環境技術,38(6),433-435。
- ・新学社近代浪漫派文庫20 北原白秋・吉井勇(2006)364pp,新学社,京都。
- ・谷崎潤一郎全集第16巻(1968)「磯田多佳女のこと」1-36,中央公論社,東京。
- ・松村 博(1994)京の橋ものがたり 京都文庫4,233pp,松籟社,京都。
- ・水上 勉(1979)鳩の浮巢に,333pp,読売新聞社,京都。

写真資料

資料提供 (財)松竹大谷図書館「祇園の姉妹」1936年度 溝口健二監督。

写真提供 角川映画「祇園囃子」1953年度 溝口健二監督。

〈企画編集〉 (財)琵琶湖・淀川水質保全機構
(社)日本水環境学会関西支部川部会

〈協力〉 (社)近畿建設協会

琵琶湖・淀川 里の川をめぐる

～ちょっと大人の散策ブック～ 〈みやびな川 編〉

白川 (Shirakawa)

【発行】平成22年6月

【発行者】財団法人 琵琶湖・淀川水質保全機構

〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31 (OMMビル13F)

TEL. 06(6920)3035 FAX. 06(6920)3036

〈ホームページ〉 <http://www.byq.or.jp>

「 飲める水 遊べる水辺 次世代に 」

琵琶湖・淀川 里の川をめぐる

～ちょっと大人の散策ブック～

みやびな川 編

白川

(Shirakawa)

(財)琵琶湖・淀川水質保全機構
(社)日本水環境学会関西支部川部会



「琵琶湖・淀川流域散策ブック」のねらい

(財)琵琶湖・淀川水質保全機構と(社)日本水環境学会関西支部川部会は、大都市圏の川を水質という側面だけではなく総合的に把握し、その機能を再評価するために川部会が2001年より行ってきた活動の成果を基礎に、「琵琶湖・淀川流域散策ブック」をまとめることになった。

この散策ブックは、琵琶湖・淀川流域の河川を散策する時に気軽に携帯できるガイドブックを意図して作られており、対象河川の概要はもとより、流域の見どころ、名水や滝、水質や生物、その川にまつわる興味深い話などが、豊富な写真や地図を用いて解説されている。

散策ブック全体は、それぞれ5、6リーフレットからなる、「源流に行く」、「おうみの川」、「みやびな川」、「歴史とロマンの川」、「なにわの川・庶民の川」の5編で構成され、本リーフレットでは、「みやびな川」編として京都市東部を流れる「白川」を取り上げた。

本ブックシリーズが、琵琶湖・淀川流域の河川に親しみを感じ、流域を散策するための一助になることを願っている。

1 白川の概要

白川は、比叡山から大文字山、如意ヶ岳にかけての京都東山北部の谷を源流とし、北白川で京都盆地に入り、南行して岡崎で琵琶湖疏水と合流し、仁王門通の仁王門橋で分流して祇園街を通り鴨川に注ぐ、流路延長7.3km、流域面積12.5km²の小河川である。淀川水系の3次支川であることから、1級河川に分類される。

白川の名前は、上流域の風化・侵食しやすい花崗岩質が風化して、石英と長石が主成分の白砂(白川砂)が下流へ多量に流出したこと由来する。この白砂の流出は北白川一帯に白川扇状地を形成している。

この扇状地には古代から人が住んでいた。また、中流部の岡崎は平安時代に白河上皇

院政の中心地となった。下流部には室町時代からの歴史を誇る祇園花街が広がる。このように白川は流路区域ごとに多彩な顔を持っている。

白川の本流は、中世頃まで北白川地区に流下後、今出川通方面へ西流し鴨川に注いでいたと言われている。しかし、当時小川であった支流が侵食によって谷を延ばし、「河川争奪」現象で本流になり、現在の河道の基本が形成された。

白川では、このような花崗岩質の地質により、降雨の増水で土石流が発生しやすい。扇状地が住宅密集地となり川幅の拡幅も困難なことから、2008年に、治水対策用の今出川分水路が、歴史的景観を損なわない地下河川として今出川通の地下に建設された。

以下では白川を上、中、下流の3つのゾーンに分け、散策コースを紹介する。



白川流域図

目次

ねらい・目次	01
白川の概要	02
白川の散策 上流ゾーン	03
コラム1 白川と文学	06
コラム2 映像にみる白川	06
白川の散策 中流ゾーン	07
コラム3 白川の水質	11
白川の散策 下流ゾーン	12
コラム4 祇園の女将・芸妓が想う白川	14

CONTENTS

(表紙写真／祇園新橋地区異橋付近の白川)

2 白川の散策 上流ゾーン

白川は、**比叡山**(838m)から**如意ヶ岳**(472m)にかけての京都東山北部の谷を源流としている。

源流地域へ向かう道路が、白川に沿った京都府道・滋賀県道30号下鴨大津線、通称「**山中越え**」である。この道は、古くから京より近江路、さらには北陸へ向かう交通要路として開かれていた。この名前は、京都市境を過ぎたところにある大津市山中町に由来する。

山中越えの峠付近に**大津市比叡平**が広がっている。この地は1960年代に高原別荘地として売り出された。現在では、通常の分譲住宅地として潇洒な住宅が立ち並んでいる。この付近の谷が白川の源流の一つである。もう一つの源流は**京都市左京区北白川小亀谷町**にある。車では、比叡平地区南より西の谷を下れば行くことができる。



白川の源流 大津市比叡平の調整池



地藏谷不動院



おたすけ水



岩に彫られた不動明王



八大竜王日天寺

日天寺急階段



白川砂が堆積する白川川底



八大竜王の滝周辺



八大竜王の滝



白糸の滝があるマンション



白糸の滝

山中越えの途中、右岸側に**地藏谷不動院**と**不動温泉**、**北白川天然ラジウム温泉**がある。付近は山が迫り、不動院は山に張り付くように建てられている。

急な階段を上ると岩壁に刻まれた不動明王に出会える。霊泉とされる「**おたすけ水**」も湧いている。温泉はいずれもラジウム鉱泉質の冷泉であり、北白川天然ラジウム温泉は淀川流域の名水の一つに挙げられている。

背後の山は**瓜生山**(301m)と言い、白川をはさんで如意ヶ岳と対峙している。「この付近は、室町時代に北白川(瓜生山)城と如意ヶ岳城との間で攻防があった古戦場」と、北白川愛郷会の案内板に記されている。

この付近の白川の流はコンクリート3面張り味気ないが、白川砂が堆積した川底だけは白く輝いている。

不動院から下ると、山中越えの京都市側起点近くの北白川琵琶町(左岸側)に、秋の紅葉で有名な**八大竜王日天寺**がある。この寺も急な斜面に建てられており、鳥居をくぐって白川に架かる朱色の欄干の橋を渡ると、60~70段はある急な階段が眼前に迫る。この付近の白川の川底は自然状態に保たれており、紅葉の写真のバックに似合いそうだ。

階段を上ると本堂だが、その上にも小さな祠がある。しかし、上りの階段は相当きつい。本堂までの途中には、**八大竜王の滝**と銘打った小さな人工の打たせ滝があり、竜の彫像の口から清水が流れ落ちるようになっている。

日天寺からさらに300mくらい下ると、右岸側に潇洒な和風デザインのマンションがあり、そのマンションの裏手に、落差10m以上はある**白糸の滝**がある。道路からのアプローチには階段が設置され、滝が見える広場も整備されているが、一帯はマンションの敷地のため残念ながら自由な出入りはできない。



白川は、山中越え起点より300m大津側に登った付近から、「U字型」に大きくカーブする。そのU字の内側に、白川砂流出対策用の広大な沈砂池が設けられており、川底に堆積した白川砂をじっくりと観察することができる。山中越え道路から直接には行けないが、道路起点に位置する浄土宗乗願院南の橋を左岸側に渡り、上流へ少し戻れば沈砂池が見える。寺の道路端には「右坂本道」と刻まれた石の道標があり、歴史を感じさせる。



沈砂池

なお、今出川分水路と同様に、治水対策用の北白川地下分水路が、この沈砂池から北白川下池田町付近まで計画されている。

沈砂池から下流の白川は、河川改修工事により岡崎当たりまでコンクリート3面張りになる。上流ゾーン最後の区間も川の護岸自体は味気ない。しかし、この北白川地区では町の歴史の香りを感じることができる。



白川と沈砂池

この地区は白川扇状地に発達したかつての白川

村である。水はけのよい扇状地であったことから縄文期から人が住みつき、江戸時代からは白川の水流を利用した水車による製粉・精米業や、白川流域の良質な花崗岩の加工を生業とする石工、水はけの良さを利用した花卉の栽培と「白川女」による販売など、特徴ある地場産業が育成されてきた。

北白川仕伏町には桜で有名な北白川天神宮がある。参道から白川を渡る橋まで全て石造りであり、「石工の里」の面影が色濃い。また、かつてこの付近で採られた白川砂は、京都の寺院の著名な庭園に敷砂として用いられている。

白川は、ここより琵琶湖疏水分線と交差する西田橋まで一気に流れ下る。白川上流ゾーン(比叡平地区北端より西田橋まで)の流路長は約5.5kmである。



白川砂



北白川天神宮



西田橋上流の白川

コラム①

白川と文学

「白川と文学」と言えば、祇園新橋地区の白川南通に建つ、吉井 勇の「かにかくに」歌碑を挙げなければならぬ。1955年建立のこの歌碑には、吉井 勇の「祇園歌集」(1915)の第一首「かにかくに」祇園は恋し寝るときも枕の下を水のながるる」が刻まれている。

この歌について、谷崎潤一郎は「磯田多佳女のこと」(1946)の中で、「私の記憶によれば、この歌は最初、『かにかくに』祇園は恋し寝るときも枕の下を水の流るる』であったように思う・・・」と書いている。

しかし、最近、吉井の草稿が発見され、その中で、「これは何かの思い間違い」と書いていることが判明した。もっとも、この部分はペンで線が引かれ雑誌に掲載されなかった。研究者は、「谷崎に恥をかかせまいという吉井の配慮がうかがえる一級の資料」と評価している。

白川自体は、文学作品でどのように記述されているのだろうか。長田幹彦の「祇園」(1923)には、「遠く聞える三味線の連弾きの音に紛れて、白川の水音が戯歌するようにしめやかに聞えて来る。」とある。

前述の谷崎の作品では、「水は清冽と云う程ではないが川床の砂利が見えるくらいに透き通っており、

いつもさやさやと咽ぶが如き音を立てて細かい波を作りながら岸を洗っていくのである。」とある。

これらはいずれも祇園新橋地区の白川を描写したもののだが、水上 勉の『『鳩の浮巢に』改題『古都春色』』(1979)には、真如堂近くの下川について、「庭樹が川面を被っておれば、川はひき水のような趣向をふかめてかげろつたし、陽なたの床下だとゴミのたまったあじけない濁り川だった。」と記述されている。

現在では、下水道の整備でこの地区においても白川の水質は良好である。しかし、白川を代表する風景は、やはり祇園新橋地区ではないだろうか。



【吉井 勇「かにかくに」歌碑】

コラム②

映像にみる白川

祇園新橋地区の白川河畔は映画やテレビドラマのロケ現場になることが多い。白川沿いの白川南通およびその北側に東西に走る新橋道の周辺は、1976年に京都市および国により「祇園新橋重要伝統的建造物群保存地区」に指定され、河畔の整備も進んだことから、ロケの適地となった。

四条通りより北に延びる小路が白川を跨ぐ橋が、有名な「巽橋」である。巽橋の映像は、一カ茶屋とともに祇園を象徴するシーンとして映画やテレビドラマの中で多用されている。

右の写真はいずれも溝口健二監督の映画の1シーンで、1936年頃と1953年頃の巽橋付近の白川が写っている。表紙に載せた現在の巽橋付近の写真と比較しても、白川の流れが過去70年間に大きく変化していないことがわかる。

この付近は、四条通を挟んで南北に広がる京都最大の花街である祇園の北部に位置し、現在の白川南通にも茶屋が密集していた。しかし、第二次大戦末期に、空襲の火災に対する防火帯設置名目で、白川南通にあった茶屋が強制撤去された。夏目漱石他文化人の顧客で有名だった磯田多佳女将の「大友」もその一軒である。

「祇園の姉妹」の方には、強制撤去前の白川とその周辺の景観が映し込まれている。



資料提供 (財)松竹大谷図書館「祇園の姉妹」1936年度溝口健二監督。



写真提供 角川映画「祇園囃子」1953年度溝口健二監督。

【映画の中の白川と巽橋】

3 白川の散策 中流ゾーン

中流ゾーンは、京都御苑（京都御所）の北側を東西に走る今出川通の最東端、通称「銀閣寺道」の西田橋から始まる。

白川はこの橋で暗渠の疏水分線と立体交差している。立体交差なので循環水路にはなっていないが（疏水分線水の一部は白川にオーバーフローしている）、白川は南下して岡崎で疏水に合流し、疏水分線は蹴上で疏水から分岐して北上するので、白川と



西田橋



銀閣寺道
左西田橋

西田橋の下を流れる白川



疏水分線立体交差部



疏水分線



鴨川と今出川分水路末端



銀閣寺



銀閣寺境内



洗月泉



法然院 山門



谷崎の墓

白砂壇



法然院墓地



疏水・疏水分線はこのゾーンでループを描く。今出川通地下には今出川分水路が建設されている。流入口自体は上流ゾーンの沈砂池-西田橋間にある。

最初の見どころは世界遺産の臨濟宗相国寺派銀閣寺（東山慈照寺）である。室町幕府8代将軍足利義政により1482年に開山された。義政は息子の将軍後継争いで応仁の乱のきっかけを作った人物だが、東山文化を育み、3代将軍義満の金閣寺（北山鹿苑寺）造営にならって銀閣寺を建立した。

総門から参道の両側に続く常緑樹の生垣の銀閣寺垣、観音菩薩を祀る楼閣建築の銀閣（国宝）、義政の持仏堂である東求堂（国宝）、白砂（白川砂と思われる）で海と山を模した銀沙灘と向月台、錦鏡池、回遊式枯山水庭園などゆっくり見学したい。庭園内には小さな人工の滝「洗月泉」もある。

銀閣寺道には、日本画壇の大家橋本関雪が設計した白砂村荘が関雪記念館としてオープンしている。東山を借景とした美しい庭園が楽しめる。

西田橋より500m下ると、疏水分線沿いに、鎌倉時代、法然が修行のために建てた草庵に由来する浄土宗の法然院がある。茅葺、数寄屋造りの山門を入ると、白砂壇（白川砂と思われる）、阿弥陀如来坐像や法然上人立像が安置された本堂、狩野光信作の襖絵（重文）がある方丈などが、紅葉の木々に囲まれている。境内に湧き出している「善気水」は名水の一つである。法然院の墓地には、谷崎潤一郎の墓をはじめ、経済学者河上肇、東洋史学者内藤湖南など、著名人の墓が並んでいる。

法然院一带は鹿ヶ谷（古名鹿の谷）と言い、後白河法皇の意を受けた藤原成親、俊寛僧都らが平家打倒の密議を行った「鹿ヶ谷事件」（1177年）の地として有名である。密議は多田行綱の裏切りで発覚し、藤原成親は備前配流後斬罪、俊寛は鬼界ヶ島流罪後憤死した。この経緯は平家物語巻第一「鹿谷」に詳しい。俊寛の悲劇は能、浄瑠璃、歌舞伎でしばしば

取り上げられる。

法然院より下り、谷御所と呼ばれる臨濟宗南禪寺派禪尼寺の靈鑑寺とノートルダム教育修道女会の間を400mほど東行すると、「歴史的風土特別保存地区」の標識の傍に**瑞光院波切不動尊**がある。ここには**金胎両部之滝**と呼ばれる小さな二つの滝があり、右側が**飛龍之滝**(胎蔵界を表現:落差約2m)、左側が**五重之滝**(金剛界を表現:落差が小さい数段の滝)と名付けられている。

不動尊入り口の近くには「**俊寛僧都旧跡道八丁**」の石の道標がある。ここからは京都一周トレイルの大文字山登山路となり、400mほど登ると「**俊寛僧都忠誠之碑**」と**楼門の滝**(落差10m)に着く。この付近に俊寛の山荘があったと言われている。

南北に走る白川通の**馬場橋**までの河畔は風情がない。しかし、吉田山から連なる真如堂、金戒光明寺の岡(黒谷)の東端を流下する流路は、コンクリート張りだが、京都市交通局錦林車庫側の左岸200m余にわたり**桜並木**が続き、心地よい散歩道を提供している。コンクリートの川底にも白砂が堆積し風情がある。

真如堂は正式名天台宗真正極楽寺と言い、比叡山延暦寺を本山とする。984年に比叡山の戒算上人が開山したが、戦乱による消失、移転を繰り返した。本来「真如堂」は本堂の呼び名だったが、寺全体を指す名称として親しまれるようになった。重文の**本堂**は京都市内の天台宗の本堂として最大規模を誇り、本尊の阿弥陀如来立像(重文)が祀られている。樹木に覆われ紅葉の名所でもある広い境内は散策にうってつけである。

隣接する**金戒光明寺**は知恩院と並ぶ浄土宗の大本山で、法然が1175年に開山した。徳川家康によって城郭構造に変えられた約13万m²の大伽藍は、幕末には京都守護職松平容保率いる会津藩1,000名の本陣になった。会津藩士の**会津墓地**がある。



瑞光院波切不動尊



五重之滝

飛龍之滝



俊寛僧都旧跡を示す道標

馬場橋付近



左岸の桜並木



真如堂



真如堂境内



黒谷金戒光明寺山門



会津墓地



熊野若王子神社



千手滝

如意輪の滝



六勝寺復原図 右手前法勝寺(京都市案内板より)



南禅寺 三門

黒谷を過ぎると河畔に並ぶ家屋の庭の樹木が河畔林となり、川面が鬱蒼としてくる。中流ゾーン最後の区間である**岡崎**に入ると、川の両側には瀟洒な邸宅が目立つようになる。

この地区の東山山麓、疏水分線に沿う「哲学の道」の起点に、「京都三熊野」の一つである**熊野若王子神社**がある。1160年に後白河法皇が建立した。「若王子」の社名は、祀られている天照大神が神仏習合した時の別称である若一王子に因んでいる。古くから桜の名所としても知られている。社殿の奥には、**千手滝**や**如意輪の滝**と呼ばれる、落差5~6mの打たせの滝がある。

岡崎公園のある白川西岸の地には、白河天皇(後に上皇)が1077年に建立した**法勝寺**があった。この地は当時洛外であったが、法勝寺建立とともに白河上皇の院政の中心地となり、「京・白河」と称されるようになった。その後もこの地には「勝」が付く寺が次々と建立され(**六勝寺**と総称)、平安後期における「白河」の繁栄をもたらされた。

白川東岸には、鎌倉時代の1291年に大明国師が開山した、臨濟宗の大本山**南禅寺**の敷地が広がっていた。しかし、明治頃から敷地の廃寺跡に次々と広大な庭園のある邸宅が建てられ、野村財閥創始者野村徳七の**野村別邸碧雲荘**、元藤田組創始者藤田小太郎の邸宅**洛翠荘**、**山縣有朋別邸無鄰庵**など、今日では**南禅寺界限別荘庭園群**と呼ばれる一帯が形成された。

これらは東山を借景に疏水の水を引き込んだ近代的な回遊式日本庭園として知られ、「植治」と呼ばれる庭師小川治兵衛により設計・施工された。**南禅寺界限疏水園池群**とも呼ばれる。

白川は、このゾーン最南の**下河原橋**を過ぎると京都市動物園の下を暗渠で流下し、琵琶湖疏水と合流する。下河原橋は、コラム3に示したように白川の水質観測地点になっている。この地点での2007年度の流量は平均0.34m³/s(29,000m³/日)である。疏水の流量は約24m³/s(約200万m³/日)なので、白川の水は1/70に薄められて下流ゾーンへと流下することになる。

白川中流ゾーン(西田橋より下河原橋まで)の流路長は約1.9kmである。



野村別邸碧雲荘



碧雲荘と
疏水の水



洛翠荘



下河原橋

無鄰庵



疏水と白川流出口(左下)



慶流橋と平安神宮の大鳥居



平安神宮



仁王門橋と流量調節堰



仁王門橋



仁王門橋を流下する白川

4 白川の散策 下流ゾーン

動物園下の暗渠から流れ出た白川は、琵琶湖を源とする疏水の流路に入り、500mほど西行した後、**慶流橋**のすぐ西側の**流量調節堰**を通して祇園街へと南流する。

このエリアには、平安遷都1100年を記念して1895年に平安京大内裏を縮小復元した**平安神宮**はもちろん、**京都会館**、**京都市美術館**、**京都府立図書館**、**京都勧業館(みやこめッセ)**、**国立近代美術館**、**京都市動物園**、**疏水インクライン**付近には、**琵琶湖疏水記念館**、**京都市国際交流会館**と文化施設が集中しており、散策の場所には事欠かない。

下流ゾーンの最初の橋は流量調節堰のある**仁王門橋**である。この堰のおかげで下流の景観は一変した。沈砂池以南の上流ゾーンと中流ゾーンの白川は、治水対策の改修工事のために断面がコンクリートの掘割になり、河川水は河畔からはるか下を流れて

コラム③

白川の水質

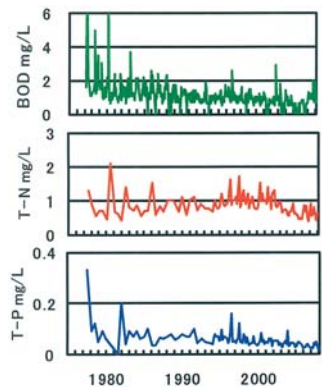
京都市内の河川には40の水質観測地点が設定されており、健康項目や生活環境項目が定期的に測定されている。白川の水質観測地点は疏水合流直前の岡崎法勝寺町にある下河原橋であり、BODなど生活環境項目が1ヶ月に1回、全窒素・全リンおよび健康項目が2ヶ月に1回観測されている。

これらの項目の中で、有機汚濁指標のBOD、富栄養化指標の全窒素(T-N)、全リン(T-P)について、1970年代からの濃度変動を、京都府の報告書をもとにグラフに示す。観測頻度に違いがある80年代前半までを除けば、3項目ともその後の変動は類似している。

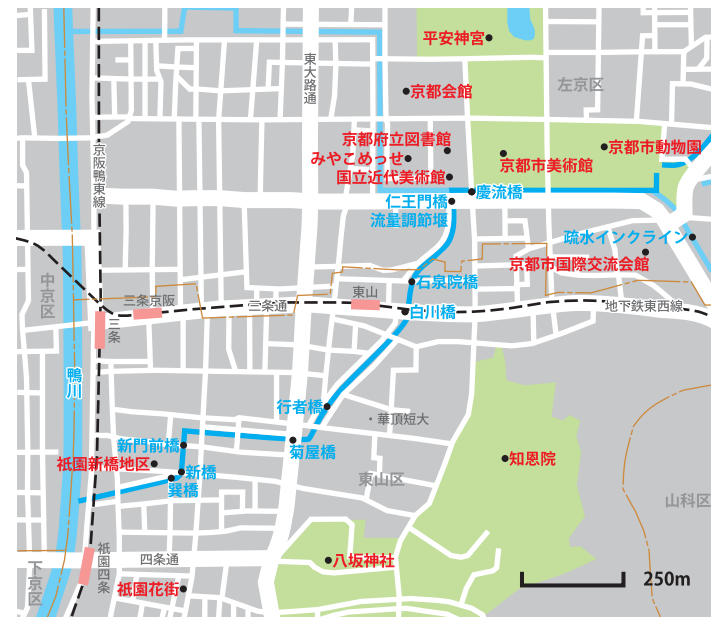
代表的な水質項目であるBODで変動を詳細にみると、80年代前半までは3mg/Lを超える高い濃度が観測されるなど、かなり汚濁していたが、その後の漸減期を経て、最近では1mg/L未満も観測され濃度がさらに低下した。

京都市の下水道普及率は、70年代は40~50%だったが、95年以降は概ね100%となっている。白川の水質変動は下水道の整備状況によく一致している。下河原橋以南の下流部は疏水の水質に影響されるが、その原水である琵琶湖の水質も良好であることから、近年の

白川は全体として良好な水質を保っていると言える。



【白川下河原橋の水質の長期変動】



いた。しかし、下流ゾーンではこの堰により増水の危険がなくなったので、大きな河道断面積を確保する必要がなくなった。

水面と河畔道路路面との高低差は1m程度になり、7~8mの川幅で適度な流速の流れは、河畔のシダレヤナギの並木とあいまって、極めて質の高い親水空間を形作っている。また、仁王門橋から最下流までの河畔には150棟あまりの伝統的建造物が分布し、上質の景観を提供している。

白川の流れは、仁王門橋から石泉院橋、三条通の白川橋を流下後、東大路通の菊屋橋まで南下し、その後白川北通に沿って西行し、花見小路通と交差して祇園街に入る。祇園街に入るとすぐにL字型に曲がって南下し、新門前通の**新門前橋**、新橋通の**新橋**をくぐった後、またL字型に曲がり、**巽橋**から白川南通に沿って西行して**鴨川**に流入する。

三条通の白川橋から東大路通の菊屋橋の間には、**行者橋**と呼ばれる手摺のない石造りの橋がある。正式名は古川町橋だが、比叡山の回峰行修行で行者が京の町を巡る際に、渡って八坂神社へ向かうことから名付けられた。京の風情が感じられる。

この橋を渡った東側には、浄土宗総本山の華頂山知恩教院大谷寺、すなわち**知恩院**の広大な伽藍が広がる。知恩院は1175年に法然により開基され、江戸時代に拡大した。**三門**や**本堂(御影堂)**は国宝であり、**経蔵**、**大鐘楼**、**大方丈**、**小方丈**、**勢至堂**など重文の建物も多数ある。

知恩院に隣接して円山公園・**八坂神社**がある。祭神は素戔鳴尊(スサノヲノミコト)ほか2体で創建は656年とされ、長い歴史を誇る。明治の神仏分離令の頃までは、釈迦が説法を説いたとされる寺院に因み「祇園社」と呼ばれていたため、「祇園さん」として親しまれている。初夏の祇園祭など京の年中行事となっている神事も多い。四条通突き当りに建つ**西楼門**(重文)は有名だが、正門は**南楼門**である。



白川橋



行者橋



知恩院 三門



本堂(御影堂)



八坂神社 西楼門



西楼門より四条通を望む



祇園花街一カ茶屋



祇園新橋地区



巽橋



祇園新橋地区を流れる白川 白川最下流全景

“祇園社”(八坂神社)と切っても切れない関係にあるのが**祇園花街**である。祇園花街は、中世の頃、祇園社門前ではじまった茶店がその起源とされている。四条通をはさんで南北に広がる祇園は、現在の京都五花街(北野上七軒、祇園、祇園東、宮川町、先斗町)随一の規模で、お茶屋60軒以上、舞妓・芸妓合わせて120人以上を有する。歴史と格式を合わせもつ日本一の花街と言える。

お茶屋の建物は京町家の雰囲気をよくとどめている。最下流部の**祇園新橋地区**における重要伝統的建造物の大半がお茶屋、または元お茶屋である。

白川周辺の伝統的建造物の保存は、地元住民の努力によるところが大きい。川自体の景観維持に関しても、白川を美しくする会、白川保存会など多くの市民ボランティア団体が活動している。白川下流ゾーン(下河原橋より鴨川流入点まで)の流路長は約2.0kmである。

コラム④ 祇園の女将・芸妓が想う白川

河畔にシダレヤナギが連なる祇園新橋地区の白川は街のシンボルとなり、祇園街の“色香”を演出する役割を果たしている。このように祇園と白川は街の景観として不可分の関係にあるが、祇園に住み、祇園で働く人々は、白川をどのように想っているのだろうか。ここでは、祇園街の人々に協力を願った「白川に関するアンケート調査」結果から、祇園街を代表する住民とも言えるお茶屋の女将や元舞妓・芸妓さん(7名)の白川に対する想いを紹介する。回答者数は多くないが、白川が祇園街の人々に親しまれている一端がわかる。

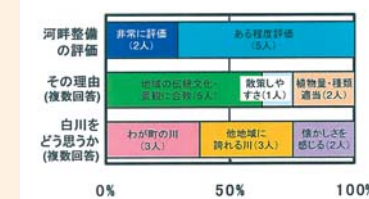
アンケートでは、白川との接し方、水質、流量、生物、白川に対する感想などについて聞いた。回答者は30才代から80才代で、いずれも祇園育ちである。

「白川」と聞いて思い浮かべる地区を聞いたところ、全員が**新橋・白川南通地区**と答えた。この地区は国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されており、お茶屋など京の町家が保存され河畔の整備が進んでいる。吉井 勇の歌碑も置かれ祇園の情緒があふれるこの地区が、白川のイメージを強く印象づけていることがわかる。水質、流速、流量など白川の流況や、川の流れ全体に

ついで印象は概ね「普通」だったが、水鳥、魚類、河畔の植物量については良い印象との回答が多かった。

この地区の河畔の整備については全員が評価しており、その理由(複数回答)は、「地域の伝統文化・景観に合致」(5名)、「植物の量や種類が適当」(2名)、「散策しやすくなった」(1名)だった。

最後に白川への想い(複数回答)を尋ねたところ、「わが町の川と思う」(3名)、「他地域に誇れる川と思う」(3名)、「懐かしさを感じる」(2名)と回答があり、地域に親しまれている川であることが強く印象付けられた。



【白川に関するアンケート調査結果】